

Ⅱ. コーディネーター活動の理念

- ・ 認知症の方等の身近な困りごと（ニーズ）を把握すること
- ・ 認知症の方や家族のニーズと認知症サポーターチームとのマッチング
- ・ チーム運営に対するスーパーバイズ

○ コーディネーターについて

チームオレンジのコーディネーターは「認知症の方等の身近な困りごとを把握する」、「認知症の方や家族のニーズと認知症サポーターチーム（チームメンバー）をつなげる」といった役割が求められています。さらに、「チームオレンジに関する検討会の開催」、「チームの立ち上げ支援」、「地域の企業や事業者との連携体制の構築」といったこともコーディネーターの役割として示され、コーディネーターは今後チームオレンジの中核を担うことが期待されています。

このように、コーディネーターには多くの役割が求められています。ただ、このような役割や形式（システム）にとらわれ過ぎないように、コーディネーターの方に心がけていただきたい理念についてまとめました。なお、この理念は、チームオレンジに携わるすべての方に通じるものです。

○ コーディネーターの活動の理念

(1) 先入観を持たずに関わる

人は「認知症」という言葉を聞くだけで多くのことをイメージします。認知症の方（以下、「本人」という。）と関わるみなさんは、特にたくさんのイメージが浮かぶと思います。

「認知症」は病名ではなく、症状や状態を指す言葉です。一人ひとりの性格や個性が異なるように、認知症の方の症状や状態もそれぞれ異なります。そのため、「認知症＝〇〇」と思いこんだり決めつけないことが大切です。ときには、「自分が先入観を持っていないか」と自分自身を振り返り、違う視点からみてみることで新しい発見があるかもしれません。

また、本人のニーズをイメージしたり、「こう想っているのではないか」と憶測で本人に寄り添うことはありませんか。ただ、実際には本人の想いと違っていることがあります。家族の方を通して、本人の想いをおしはかることもありますが、本人ではなく家族のニーズになっていることもあるので気をつけなくてはなりません。

(2) たずねずに聴く

本人の本当のニーズを知るためには、本人が自ら話し始めた言葉を大切にしましょう。自然と本人が口にした言葉を集めると、そのなかから見えてくる本当のニーズがあるかもしれません。

本人が自ら話してもらおうきっかけづくりとして、「私の趣味で〇〇することが好きですが、△△さんはどのような趣味がありますか？どのようなことをすることがお好きですか？」などと聴き手側から自分の想いをオープンにし、本人も自分の想いをオープンにしやすい雰囲気になるよう意識し、一方的な聞き取りにならないようにしましょう。

(3) 本人の想いを受容する

本人の言葉を批判したり、遮らないようにする。また、本人が本当の想いを話すには時間がかかることもあるので、「時間をかけて待つ」ことも大切です。

(4) 信頼関係を築く

相手との関係が築けていなければ、自分のニーズは話しにくいものです。時間はかかりますが、訪問や声かけなどを通してお互いに知る機会を持つことが信頼関係につながることもあります。また、人それぞれ好きな場所や気候、雰囲気なども違いますので、本人がどのようなことが好きなのかを知ることも大切です。

(5) 本人とともに楽しむ

「話を聞く」という姿勢そのものが、本人にとって負担や不安になることがあります。本人と関わるなかで、本人から自然にニーズが聞かれることがもっとも望ましいです。「他人は自分を写す鏡」という言葉があるように、自分が楽しむことが本人の楽しみにつながるがあるので、聴き手側が個性をだすなど、自分のことを知ってもらうことも大切です。

また、最初に「なにか困りごとはありませんか」と聞くと、支援する側と支援される側という関係性が生まれます。趣味や日常の楽しみなど、困りごと以外から関わりを持つことが大切です。ときには専門職という鎧を脱いで、「認知症の方と支援者」ではなく、「人と人」として向き合うことが大切になります。

(6) しんがりをつとめる（いちばん後方からみるようにする）

先述したように、一人ひとりの症状や状態は異なるので、すぐに周りとは良好な関係性を築ける方もいれば、周りとの関わりが苦手な方もいます。コーディネーターは多くの認知

症の方と関わることになるかもしれませんが、「(関わりなどが) 得意な方」ではなく「苦手な方」の視点から寄り添い方などを考えていくことが大切です。

○ チームの運営について

(1) チームオレンジのメンバー（以下、「メンバー」という。）の活動内容

メンバーは原則ボランティア活動となります。チーム運営に対するスーパーバイズを担うコーディネーターは、そのメンバーが役割や活動を自分で理解できるように内容を工夫することが大切です。例えば、認知症カフェを行う際には、タイムスケジュールや分担表、配置図を作成して示すなど、そのメンバーに求める役割が具体的に伝わるようにしましょう。

(2) メンバー同士が想いを共有する場をつくる

メンバーによっては、「自分でいいのかな」「このやり方でよかったのかな」など、迷いながら活動していることもあります。同じ立場であるメンバー同士が活発に意見交換をすることで、メンバーの安心や自信につながります。

(3) コーディネーターとメンバーがコミュニケーションをとる機会をつくる

コーディネーターは公平な立場でメンバーの話を聞くとともに、メンバーのモチベーションを高める声かけやアドバイスをすることが大切です。また、話し合い（交流会・勉強会）を持つことでコーディネーターとメンバーの間に認識の「ズレ」が見つかることがあります。そうした「ズレ」をなくすためには、対話をくり返す必要がありますが、そうすることで話し合いができる土台ができてきます。

また、メンバーから「(認知症の方) 本人への接し方がわからない」といった声があがれば、認知症の方の生活環境や状況を踏まえ、一緒に向き合って考えましょう。必要に応じてステップアップ研修を行うことも効果的です。

(4) メンバーの自主性が育つよう意識して関わる

メンバーから出た意見をコーディネーターが活動に取り入れたり、メンバーに明確な役割を担ってもらうことが、メンバーの自主性につながります。そのなかで課題が出てくることもありますが、その際は一緒に課題と向き合うようにしましょう。課題への対応を積み重ねることでメンバーの対応力の向上につながります。

